

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2017年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学	研究科 コミュニティ福祉学	専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部	三本松 政之	印
研究課題名	韓国の自死遺族の現状に見る生活課題と社会的支援ニーズに関する研究		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科・ コミュニティ福祉学専攻・ 後期課程6年	朴 恵 善	印
研究期間	2017年度		
研究経費	100千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

15人の自死遺族を対象に2013年度に実施した調査の分析結果を踏まえ、自死遺族の抱えている生活課題の複合のあり方について類型化し同調査後に生じた社会生活上の困難や死別後の生き方、社会関係などに関わり、どのような困難が生じているか調査を行った。自死遺族の抱えている問題はこの調査でも変化していなかった。自死遺族の様々な問題は、自殺に対する社会的偏見の存在があり、それが家族の自殺の事実を心に閉じ込めて、その態度が社会的断絶を引き起こしつつ、家族問題、人間関係問題、経済問題、教育問題などそのいずれかが根底にあるとはいえない。そのメカニズムの解明にはさらに詳細な検討が必要である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[自死遺族の経験] [生活課題] [社会的支援ニーズ]

研究成果の概要（図・グラフ等は使用しないこと。）

【研究の目的】

本研究の目的は、15人の自死遺族を対象に2013年4月から2014年3月にかけて実施した聞き取り調査（以下、「2013年度調査」）の分析結果を踏まえ、遺族から十分に聞き取ることでできなかった事項を中心に同じ自死遺族を対象とした補充調査である。2013年度調査で自死遺族の抱えている様々な家族問題、人間関係問題、教育問題、経済問題などが複合的に関わり問題を構成していることを明らかにし、結果を踏まえて複合のあり方について類型化し仮説的に提示した。補充調査の課題は、「2013年度調査」後に生じた社会生活上の困難や死別後の生き方、社会関係など各類型ごとに聞き取りにある。

【研究の方法】

1) 自死遺族への補充調査の内容：「2013年度調査」の対象と同一の15人中、再調査の協力を得られた8人の自死遺族を対象に、半構造化面接法を用いて調査を実施した。調査内容は、「2013年度調査」での分析から複合化の関連について仮説的に提示した4類型を踏まえて、8人の韓国の遺族から聞き取り調査を行い、a 家族問題、b 人間関係問題、c 経済問題、d 教育問題などとの関連を明らかにする。

2) 研究協力者：A：女-56歳、B：女-42歳、C：女-27歳、D：女-23歳、E：女-33歳、F：女-58歳、G：女-66歳、H：男-50歳

3) 調査期間：2017年8月6日～8月18日

4) 調査分析：質的データ分析（佐藤、2008）手法を用いており、定性的コードは〔 〕、焦点的コードは【 〕、概念的カテゴリーは〈 〉で示した。

【研究の成果】

本研究では4つの類型を仮説的に想定していたが、調査結果の分析から①「家族問題が基底にあり、人間関係問題に影響した型」②「家族の稼得者であった者がなくなったことによる経済問題が基底にあり、人間関係問題を含む型」③「自殺のことが周囲に知られてしまったことによる人間関係問題から経済問題、家庭問題に影響した型」④「子が第一発見者であり、学校の生活ができなくなったことによる人間関係問題に影響した型」⑤「家族を亡くして悲しみが経済問題に影響した型」という5つの類型化にまとめることができた。

①「**家族問題が基底にあり、人間関係問題に影響した型(D、E事例)**」：〈家族問題〉の焦点的コードは【家族への怒りと憎しみ】である。まず、〔父は母に暴力を振るって、父に対する憎しみ〕が生じ、予想していなかった家族の自殺に衝撃を受けて困惑している中で自殺の事実が信じられず、家族の故人に対する思いの違いから家族を憎悪していた。また家族員の各々がうつ状態で〔母と妹と話をすると大変で怒りが出る〕。自分も受け入れるエネルギーがないので、ひどく腹を立ていつも喧嘩していた。第2の焦点的コードである【家族関係の悩み】は互いに話していないし、仲は良くないが〔親のことがいつも心配〕である。家族だから心配している。また、家族内で他人のように〔家族別々の生活〕をしているため家族関係が悪くなって、「率直には一人暮らしをしたいですが…家族だから仕方ないです」といった気持ちを持っており、家族関係が難しい。〈人間関係問題〉の焦点的コードは【他人との心の壁】である。〔人と形式的に会っているから職場でもさびしい〕こと、〔弟が亡くなったことは話したりするが、自殺で亡くなったことは話していない〕ことで、他人に自分の家庭は幸せに見えるように家族の死さえ知らせたくない気持ちを持っていた。また〔弟の自殺のことを言えず人と深い話を分かち合う関係までにならない〕ことで、自分が思うのと同じように他人は感じていないことを経験したのでカミングアウトをしないようにする。第2の焦点的コードである【消極的關係】は家族が自殺してから自尊心が低くなり、〔人と話をするとき主に話す側より聞く側になっている〕ことで誰かに会うと自分も知らずのうちに萎縮してしまう。家族問題が円滑にできず、また自殺に対する社会的偏見があるため、自分の深い話まで語らない。そのため、人間関係に消極的になっている。

②「**家族の稼得者であった者がなくなったことによる経済問題が基底にあり、人間関係問題を含む型(B、G事例)**」：〈経済問題〉の焦点的コードは【**貧困による生活基盤の不安定**】である。〔生活するのに基礎生活受給費だけでは足りない〕。〔次男は家の生活費に大きい助けになった〕が、家族の稼得者であった者が亡くなって経済的に大変である。また基礎生活受給費だけでは税金も払えず食べることだけなので〔子どもたちの教育費のために働いている〕が、税金が引かれない仕事を探している。高齢になっているし、障害者のため就職ができないので〔夫が高齢者を対象にした仕事をしていて1ヵ月20万ウォンで生活をしている〕。〈人間関係問題〉の焦点的コードは【**社会的孤立**】である。〔以前知っていた周囲の人たちを避けている〕。知り合いに経済的に困窮してみずぼらしい姿を見せたくない。そのため、〔私のすべてのことを知っている一人のお姉さんだけに会っている〕。自分のことをよく理解し何もなくても平穩に話ができる人だけに会っていた。しかし、金がかからなく心地よい集まりに参加しているが、〔私の話で他の遺族が傷つけられ、自分を責めるようになり遺族の分かち合いの会に行かない〕ようになり、居場所さえ失っていた。経済問題で自分のことをすべて見せてもよい人を中心に会って

研究成果の概要 つづき

おり、金が必要などころにはわざわざ行かないようにしている。人間関係が限られている。

③「自殺のことが周囲に知られてしまったことによる人間関係問題から経済問題、家庭問題に影響した型(H事例)」:〈人間関係問題〉の焦点的コードは【人間関係への負担感】である。119と警察が一緒にきたので近所の人たちが集まって自殺に対する悪い話をするのを聞いてしまった。その後、近所の人たちの悪いうわさもあり、自殺ではなく心臓麻痺で亡くなったと、「友達にうそをついて会えなくなった」。また「新しい関係をもつと子どもについて聞かれる」ので、子どもは何人なのかなど、子どもについて詳しく聞かれるのがとても気になって人間関係を持ちたくないと考えていた。〈経済問題〉の焦点的コードは【経済的不安定】である。「次女が亡くなってから正常な生活ができない」ことであり、仕事をしていても能率が上がらず1ヶ月にある時は100万ウォン以下、100万ウォンを超える時もある。そのため、ずっと貯蓄した金で生活してきた経済的に大変であった。〈家庭問題〉の焦点的コードは【家族とのコミュニケーションの断絶】である。「長女と話していない」「妻と話していない」ことであり、家に帰ってきたら挨拶もしないで部屋に入ってしまったり、食事する時も自分の分を持って部屋で食べたりしている。人間関係がうまくいかず、酒を飲み始めていた。仕事するときにもずっと酒を飲んでおり、仕事に集中できなくなった。そのため、経済的に困難が生じ、家族の信頼が崩れてしまった。家ではうとうとしい雰囲気、会話もまったくない状況である。

④「子が第一発見者であり、学校の生活ができなくなったことによる人間関係問題に影響した型(C事例)」:〈人間関係問題〉の焦点的コードは【自信喪失】である。子どもが第一発見者であり、すべて大人たちの判断で「引っ越しと転校」した。大人たちは子どものためであると言っているが、理由も知らず急いで引っ越しと転校をさせられたことで、子どもとしても家族の自殺はよくないことで誰にも言うてはいけないことであると認識する。「ただ身体だけが学校に来ている」で、授業の時間でもぼやっとしていた時間がほとんどだったし、早く学校から逃げたいと考えていた。「母のことを聞かれることの不安」により、友達と一緒にいるときも不安で、いつ母の話を聞かれるかもしれないとずっと人の顔色を伺ったり、人を意識していた。第2の焦点的コードは【閉鎖的關係】であり、「一人ぼっち」である。他の人と一緒にいると落ち着かなく、一人で遊んでいることに慣れていった。子どもが第一発見者の場合、大人たちの考えと行動が子どもに間違えた認識をさせることにより子どもが人間関係を形成するのに支障を与えている。

⑤「家族を亡くした悲しみが経済問題に影響した型(A、F事例)」:〈経済問題〉の焦点的コードは【経済的危機】である。まず、「家族は私と息子、二人しかいなかったのに、本当に息子は私の人生の全部であった」が「2年間もう夫のことで仕事ができなかった」ことで、家族が亡くなった悲しみで何が起きたのか分からず、何の感覚もないまま時間を過ごしていた。身体的にも問題などが生じており、食べること、寝ることも大変で100%仕事をするのができなくなった。生活するために保険料を担保に信用借出をしたり、貯金も全部無くなったりして「借金もある」。さらに「年も取っていて仕事は限られている」「生計維持のみしている」状態で経済的に困っている。家族の自殺は自殺者に対する喪失感などで気持ちが落ち着かず、生活は崩れ経済的に破綻している。

【考察】

自死遺族の抱えている様々な問題が3～4年後の調査でも変化せず、生活課題は相変わらず自死遺族の生活に影響していた。家族を自殺で亡くした後、遺族が抱えている生活課題は全て同じではない。複合的について5類型に整理した。家族問題、人間関係問題、教育問題、経済問題などが複合的に関わっていることを見いだした。しかし、今回の調査からは複合化するメカニズムを解き明かすにはいたっていない。自死遺族の様々な問題は、自殺に対する社会的偏見の存在があり、それが家族の自殺の事実を心に閉じ込めて、その態度が社会的断絶を引き起こしつつ、生活課題に影響していると考えられる。しかし5類型を検討すると家族問題、人間関係問題、経済問題、教育問題などそのいずれかが根底にあるとはいえない。そのメカニズムの解明にはさらに詳細な検討が必要である。その上で問題は連鎖して起きていることを念頭に置いて、各類型ごとによる具体的な支援方法を開発し、支援を行う際に一つ問題としてではなく、この事例に有効な支援の優先順位も考慮する必要がある。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

該当するものなし